

生殖補助医療と出生率

Assisted Reproductive Technology and fertility

林玲子（国立社会保障・人口問題研究所）

Reiko Hayashi (National Institute of Population and Social Security Research)

日本産科婦人科学会が収集・公開している日本における体外受精・胚移植等の臨床実施成績（ART データブック）によれば、2014年の生殖補助医療を用いた出生（以下「ART 出生」とする）は47,322件、全出生数の4.72%にのぼっており、近年著しく増加している（図1）。またその割合は、諸外国と比較しても高い水準となっている。総出生に占めるART出生の割合は、母の年齢が上がるにつれて上昇し42歳前後で割合が一番高くなるがその後減少する。5歳階級別にみれば、データがある2008年以降、40-44歳のART出生割合が一番高いが、その割合は2008年の7.8%から2014年の15.9%へと倍増している。一方ART出生数および女性総数に対するART出生数の割合で見た場合、35歳～36歳が一番多く、その傾向は2008年から2014年まで同様である。

合計特殊出生率に占めるART出生の割合をみると、2014年の合計特殊出生率1.42のうち、ART出生分が0.06である。2008年から2014年までの合計特殊出生率は1.367から1.422へ0.055増加しているが、ART出生分は同じ期間に0.025から0.059へ0.035増加している。つまり2008年から2014年の合計特殊出生率の63%（ $=0.035/0.055$ ）は、ART出生の増加によるものである。今後の合計特殊出生率がこれまで通り上昇していくかどうかに関して、その趨勢の大半はART出生数の動向に依存していると考えられる。

それでは今後これまでと同様のペースでART出生数は増加し、合計特殊出生率の微増に寄与するだろうか。欧州においては2009年までの各国のART出生割合が4.5%に収束していたことから、それが上限値とみなされていたが、その後2010年のデンマークのART出生割合は5.9%となり、ART出生率に上限があるかどうかは定かではない。仮にART出生数の伸びが今後も同様が続くと仮定し、2010年から2014年までの年平均増加率13%を2015年以降もあてはめれば、2020年にART出生数は10万弱、2030年に34万人となり、その頃の推計年間出生数の半分程度に相当する数となり、非現実的に思える程度に大きい。

ART出生数は、①挙児希望がある（子供が欲しい）が②自然妊娠せず（不妊の心配があり）、③ARTを行うことにより④妊娠し、⑤出産に至った数であると整理でき（図3）、ART出生数は、これら①～⑤の条件に依存する。ARTデータブックでは母の年齢各歳別に、総治療周期数、妊娠周期数、生産周期数が公表されているので、それぞれ③ART実施数、④ART妊娠数、⑤ART出生数とみなして、女性人口総数に対する割合を、全体の出生率およびARTを除く出生率とあわせて図2に示した。これをみると、ART実施からART出産に至るまでには大きな隔りがあることがわかる。この隔りが技術革新により縮小できれば、ART出産数は増加する。また、国立社会保障・人口問題研究所が2015年に行った第15回出生動向基本調査によれば、50歳未満の有配偶女性の5.2%が調査時において不妊の心配をしており、そのうち35%が不妊の検査や治療を受けている。後者の割合は2010年の25%よりも増加しており、不妊の心配=不妊治療に対するニーズが近年満たされつつあるのでは

ないかと考えられる。この割合を③ART 実施数に逆算し、②不妊の心配がある（ART ニーズ有）とし、それがすべて満たされ、2014 年の③→④→⑤の確率で出産にいたると仮定した場合の ART 出生数は 135,136、将来的に ART が進歩しニーズがあればすべて出産に至ると仮定した場合の ART 出生数は 1,156,519 となる。出生数全体に対する割合は前者で 12.4%、後方で 54.7%となる。後者は現実的ではないかもしれないが、前者程度に上昇しうると考えることもできるだろう。

しかし、ART データブックに登録されている ART 出生が、かならずしも人口動態統計で定義される出生に含まれるわけではない。父母が外国人で日本で ART を実施した場合や、日本人が海外で ART で受胎し日本で出産するケースもあるだろう。また ART データブックでは、50 歳以上の出生数が 2014 年で 4 件のみであるが人口動態統計では 58 人（うち第一子が 41 人）であり、差が大きい。

妊娠・出産は母体にとっても子供にとっても早い年齢の方が望ましいが、女性のライフコースが変化し寿命が延びるなか、出産年齢の高齢化は避けることはできず、ART はヒト再生産の一つの重要な選択肢となっている。

図 1 ART 出生割合の推移

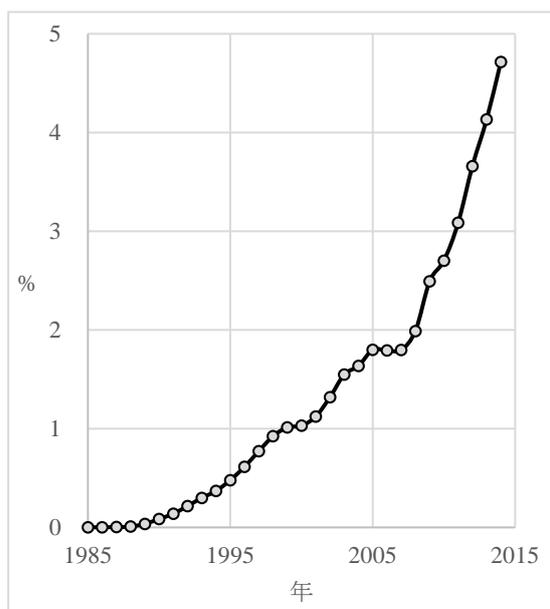
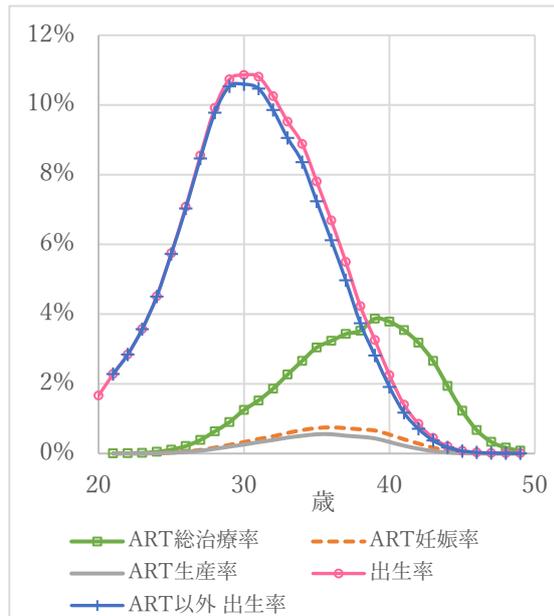


図 2 年齢別 ART 関連出生割合 (2014 年)



出典)日本産科婦人科学会「ART データブック」、厚生労働省「人口動態統計」

図 3 挙児希望から出産までのフローチャート

